

カリキュラム開発研究 研究構想図

東京都教職員研修センター 研修部教育開発課
板橋区立赤塚第二中学校 伊藤 健

【社会背景】 <ul style="list-style-type: none">国際語学教育機関「EF エデュケーション・ファースト」が2024年に発表した「EF EPI 英語能力指数」によると、英語を母語としない116ヶ国・地域のうち、日本人の英語力は92位、アジア23ヶ国・地域では16位という結果 【今日的な教育課題】 <ul style="list-style-type: none">グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成(第4期教育振興基本計画)外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる学習の促進(中学校学習指導要領(平成29年度告示))世界を舞台に活躍できる人材の育成(「東京都教育施策大綱」一特に重要で優先的に取り組む事項一(令和7年3月))	【東京都教育委員会の教育目標】 <ul style="list-style-type: none">互いの人格を尊重し、思いやりと規範意識のある人間社会の一員として、社会に貢献しようとする人間自ら学び考え行動する、個性と創造力豊かな人間 【東京都教育ビジョン(第5次)】 <ul style="list-style-type: none">○基本的な方針3「グローバルに活躍する人材を育成する教育」・使える英語を駆使し、自分の意見を伝え議論することで新たな考えを生み出し、国内外の課題を解決していく力を伸ばすための取組を強化・異なる言語や文化、価値を乗り越え関係を構築する力、新しい価値を創造する力の育成○主な施策展開「中学校における外国語教育の充実」英語「話すこと」の指導の充実を図るため、中学校英語スピーキングテスト(ESAT-J)を実施	【教科等の課題】 <ul style="list-style-type: none">令和5年度全国学力・学習状況調査(中学校英語)話すこと調査において、平均正答率は12.4%(平均正答数0.6/5問)であった。特に[発表]の領域において、社会的な話題に関して聞いたことについて、考えとその理由を話すことができるかどうかを趣旨とする活動の正答率は4.2%と最も低い。令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査「話すこと[発表]」において、伝えようとする内容を整理した上で話すことについては、通過率が他の問題より低い。 【所属校の実態】 <ul style="list-style-type: none">令和5年度全国学力・学習状況調査の結果では、第3四分位数の正答数が12.0問であった。
--	--	---

【育てたい児童・生徒像】 <p>事実や考えなどを整理して、まとまりのある内容を伝えることができる生徒</p>

【先行研究】 <ul style="list-style-type: none">令和6年度「デジタルを活用したこれからの学び」(東京都教育委員会)令和6年度「小・中・高等学校の接続を意識した『使える英語力』の育成～『話すこと[発表]』の指導と評価～」(研究開発委員会指導資料 東京都教育委員会)令和6年度 子供が自ら伸び育つ力を育むデジタルを活用した授業デザインに関する研究(2年次)(東京都教職員研修センター)
--

【研究主題】 <p>「話すこと[発表]」の領域において、事実や考えなどを整理して、まとまりのある内容を伝えることができる生徒の育成 — 生徒一人一人が、学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成の工夫を通して —</p>
--

【主題設定の理由】 <p>1 社会状況と今日的な教育課題 「東京都教育施策大綱」(特に重要で優先的に取り組む事項)では、「世界を舞台に活躍できる人材の育成」の重要視が示されている。訪日外国人だけでなく、在留外国人の数が増加している今日においては、言葉の壁を乗り越え、国内外で課題を解決していく力を伸ばすことが必要である。 また、令和5年度全国学力・学習状況調査(中学校英語)では、「話すこと」の領域における平均正答率が12.4%(5問中0.6問)と著しく低く、特に[発表]の領域における課題が顕著となった。社会的な話題について、聞いた内容を基に自分の考えとその理由を述べる設問の正答率は4.2%にとどまり、生徒が自らの考えや情報を整理して、表現することに課題があることが明らかになった。また、令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査でも、小学校生活の思い出を自分の気持ちや考えを含めて話す問題における通過率は、知識・技能64.0%、思考・判断・表現64.7%と他の設問と比べて低い。この結果から、事実と伝えたいことを整理し、簡単な語句や基本的な表現を用いて話す力に課題があることを示している。</p> <p>2 英語科の指導についての課題及び解決に向けて こうした状況を受け、本研究では英語科における「話すこと[発表]」の指導改善を重点課題として位置付けた。特に、全国学力調査で課題とされた「自分の考えやその理由を整理する力」の育成をねらいとし、主題を「事実や考えを整理し、まとまりのある内容を伝えることができる生徒の育成」と設定した。中学校学習指導要領解説外国語編(平成29年3月)では、まとまりのある内容を伝えるとは、一つのテーマに沿って発表を行い、内容に一貫性をもたせて構成することとされている。本研究では、この「一貫性」を高めるための具体的な観点として、①事実と考えを整理すること、②話し手としての伝えたい内容や順序、聞き手にとって分かりやすい構成を考えること及び③文と文をつなぐ語句を適切に用いること、の3点に焦点を当てた。これらを改善することで、「話すこと[発表]」における論理的に表現する力の向上を図り、調査で示された全国的な課題の改善につなげたいと考える。</p> 【副主題設定の理由】 <p>本研究の副主題は「生徒一人一人が学びのプロセスを自ら決定できる単元構成」とした。ここでいう学びのプロセスとは、自己課題を解決するための学習内容や方法を選択することである。令和5年度全国学力・学習状況調査の質問紙では、課題解決に向けて自分で考え取り組む生徒や、資料の活用や話の組立てを工夫して発表する生徒ほど平均正答率が高い傾向が示された。これは主体的な学習態度と学力の向上に一定の相関があることを示唆している。そこで本研究では、生徒がまとまりのある内容を伝えることを目指し、自ら学習内容や学習方法を選択・決定し、振り返りながら自己調整して学びを深められる単元構成を開発した。</p>
--

【研究仮説】 <p>生徒一人一人が、学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成の中で、学習の自己調整を繰り返しながら、自らの考えを形成したり深化させたりすることで、事実や考えなどを整理してまとまりのある内容を伝える力が向上するだろう。</p>

	目的	資料・方法(実施予定月)
基礎	・英語科に関する課題を把握 ・東京都の教育課題を把握	・先行研究の調査 ・「東京都教育施策大綱」(東京都教育委員会, 2025)
調査	・研究対象校の実態把握 ・仮説の検証	・検証授業実施校 授業見学(6月~7月) ・教員対象 質問紙調査の実施(8月) ・生徒対象 質問紙調査(事前調査)の実施(9月)
開発	・調査研究で明らかになった課題の解決	・「学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成」及びワークシートI・IIの作成 ・検証授業(対象:5クラス 計40時間)実施(9月~10月) ・生徒対象 質問紙調査(事後調査)の実施(10月)
検証	・効果検証 ・検証結果を踏まえた改善策の考案	・質問紙調査及び第4時及び第8時における発表原稿の一貫性を比較、分析 ・パフォーマンステストの評価と第8時原稿の評価との相関について比較・分析 ・「学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成」を生かし、「日常的な話題」と「社会的な話題」に関する3学年分6単元にわたる単元計画を作成

研究主題「話すこと [発表]」の領域において、事実や考えなどを整理して、まとまりのある内容を伝えることができる生徒の育成
— 生徒一人一人が、学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成の工夫を通して —

東京都教職員研修センター研修部 教育開発課
板橋区立赤塚第二中学校 主任教諭 伊藤 健

第1 研究のねらい

令和5年度全国学力・学習状況調査（中学校英語）では、「話すこと」の領域における平均正答率は12.4%（5問中0.6問）と極めて低い水準にとどまった。中でも、[発表]の領域において、社会的な話題について聞いたことを基に、自分の考えとその理由を述べる問いに関しては、正答率が4.2%と最も低かった。さらに、令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査において、小学校生活の思い出について自分の考えや気持ちなどを含めて話す問題に関しては、【(知識・技能)通過率64.0%】【(思考・判断・表現)通過率64.7%】であり、他の設問に比べて通過率が低く、自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことに課題があることが示唆されている。以上の点を踏まえ、本研究では英語における「話すこと [発表]」の領域に焦点を当てることとした。特に、令和5年度全国学力・学習状況調査において課題とされた「自分の考えやその理由を整理すること」の改善をねらいとする。また、中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年3月）では、外国語科における「思考力、判断力、表現力等」を身に付けるためには、外国語によるコミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を捉え、それを整理したり吟味したりしながら思考を深めることで、自らの考えを形成したり深化させたり、さらに表現を選択したりして「論理的に表現」することを重視するとある。さらに、英語外部試験においても、語彙や文法の正確さに加えて、英文のつながりやまとまりの観点の評価項目に含まれている。そこで、主題を「話すこと [発表]」の領域において、事実や考えなどを整理し、まとまりのある内容を伝えることができる生徒の育成」と設定した。本研究における「まとまりのある内容」を伝えるとは、一つのテーマに沿って発表を行ったり、内容に一貫性をもたせてスピーチを構成したりすることを意味している（中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年3月））。内容に一貫性をもたせるために、本研究では、以下の3点に着目した。

- ①事実と考えを整理すること。
- ②話し手として伝えたい内容や順序、聞き手として分かりやすい展開や構成を考えること。
- ③文と文のつながりを示す語句を用いること。

また、本研究の副主題は、「生徒一人一人が、学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成の工夫を通して」とした。本研究における学びのプロセスとは、自己課題を解決するための学習内容や方法とした。令和5年度全国学力・学習状況調査における生徒質問紙調査において、課題解決に向けて自分で考え取り組む生徒や、資料や話の組立てを工夫して発表する生徒ほど、平均正答率が高い傾向が見られた。このことから、主体的に学習に取り組む姿勢と学力の向上との間には一定の相関($r=0.290$)が示唆される。この結果を踏まえ、本研究では、生徒が、まとまりのある内容を伝えることを目指して、学習内容や学習方法を自ら選択・決定し

たり、振り返ったりして、自己調整を図りながら、自分自身の学びを深めていくことができるような単元構成を開発した。

第2 研究仮説

生徒一人一人が、学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成の中で、学習の自己調整を繰り返しながら、自らの考えを形成したり深化させたりすることで、事実や考えなどを整理してまとまりのある内容を伝える力が向上するだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

「デジタルを活用したこれからの学び」(東京都教育委員会, 2025) の実践事例では、生徒は、学び方を身に付け、自己調整を図りながら主体的に学習に取り組むことの重要性と有効性が示されている。

2 調査研究

(1) 「話すこと [発表]」に関する調査研究 (教員対象)

令和7年8月、都内公立中学校外国語(英語)科教員を対象に、「話すこと [発表]」に関する調査を四件法及び記述式による質問紙法で行い、35人から回答を得た。

調査の結果、教員が「話すこと [発表]」の活動において最も高い頻度で実施していたのは、「日常的な話題」を扱う項目であった。一方で、「社会的な話題」を扱っていた教員は3%のみであり、社会的な話題を授業に取り入れることには一定の困難さがあることが示唆された。

また、「生徒が自ら学習内容を決め、計画的に学習に取り組む活動を取り入れている。」という項目に対して、「どちらかといえばそう思わない」及び「そう思わない」と回答した教員の合計は49%に上った。この結果から、全体の約半数の教員が、生徒が自ら学習内容を決め、計画的に学習に取り組む活動を十分に取り入れられていない現状が明らかとなった。さらに、上述質問について理由を尋ねる自由記述には、「生徒主導にしたとき、習熟度に差が出てしまうから」「教科書の内容を終わらせること及び知識を定着させることで精一杯だから」、「自己選択をさせる以前に、「基礎・基本」の土台作りが必要だと感じるから」及び「自己選択をどのように取り入れていけばよいのか、実践例が分からないから」などの意見が見られた。

(2) 「話すこと [発表]」に関する調査研究 (生徒対象)

令和7年9月、都内公立中学校1校の第1学年生徒を対象に、「話すこと [発表]」に関する調査を「そう思う」、「どちらとも言えない」及び「そう思わない」の3件法による質問紙法で行い、164人から回答を得た。なお、同年10月に実施した事後調査では自由記述欄を設けた。質問項目及び調査結果は、「5 事後調査」にて記載する。

3 開発研究

(1) 学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成

本研究の検証授業で取り扱った単元の目標は、「自分のことをよりよく知ってもらうために、憧れの人について、事実と考えを整理して、発表することができる。」である。

まず、第1節(第1~4時)では、生徒は単元全体の見通しやパフォーマンステストのねらいを理解する。また、教科書の本文や当該単元で扱う文法事項の学習を生かしながら、事実と考えを整理したり、聞き手に配慮した発表構成を考えたりする。教科書本文の理解については、

授業者が作成した解説動画を事前に配信して、生徒はそれを視聴して授業に臨む。

第2節（第5～8時）では、生徒は複数の学習課題から自分に適切な方法を選択し、一貫性のある発表を目指して試行錯誤を重ねる。本研究における単元では、ねらいを達成するための学習内容として、生徒に以下の6点を提示した。

- ①発表原稿を再構築する。
- ②発表原稿を比較し合う。
- ③聞き手に分かりやすい語句や表現を調べたり、考えたりする。
- ④発表の練習をする。
- ⑤視覚資料を作成する。
- ⑥オリジナル（自己課題に応じた学習内容）

学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成

第1節				第2節			
第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
<ねらい> 単元の見直しをもつ。 教科書本文や当該単元で扱う文法事項の学習を通して、自分の考えをまとめる。				<ねらい> 自分自身で学習の調整を図りながら、発表の質を高める。			
<学習活動の例> ○事実と考えの違いを理解する。 ○話の順番を決めたり、相手が聞きやすい発表の構成を考えたりする。 ○文と文のつながりを示す語句を探したり、まとまりを意識したりして、発表原稿を構築する。 ○憧れの人について、自分の考えや、その人の情報を整理して、まとまりのある発表原稿を書く。				<学習活動の例> ○発表原稿を再構築し、内容の一貫性や構成を見直しかにする。 ○聞き手に分かりやすい語句や表現を調べたり考えたりする。 ○発表の練習を行い、発音やイントネーションを調整する。 ○視覚資料を作成し、発表内容を効果的に補足する。 ○自分の現状や課題に適した学習を行う。			

図1 学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成<学習活動の例>

学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成

第1節				第2節			
第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
<ねらい> 単元の見直しをもつ。 教科書本文や当該単元で扱う文法事項の学習を通して、自分の考えをまとめる。				<ねらい> 自分自身で学習の調整を図りながら、発表の質を高める。			
<教員による支援の例> ○生徒が、単元の見直しをもてるように、教員による発表のモデルを見せる。 ○生徒が憧れの人に関する事実や自分の考えを整理しやすくするために、教科書本文にある事実や、登場人物の考えを整理する活動を行う。 ○生徒が憧れの人に関する発表原稿の構成をしやすいように、文章構成やまとまりを意識して教科書本文を音読する活動を行う。 ○本文解説動画を事前に配信する。				<教員による支援の例> ○教員による発表のモデルを見せる。 ○生徒が取り組むべき自己課題を認識できるように、教室全体で確認したり、個別にコーチングしたりして支援する。 ○自己課題を認識できるようにするために、生徒同士で発表した後に、適宜、フィードバックし合う時間を設ける。 ○生徒が自己課題を認識し、適切な学びを行うことができているかをデジタルワークシートで確認し、個々の生徒が目標を達成することができるよう支援する。			

図2 学びのプロセスを自ら決定することができる単元構成<教員による支援の例>

生徒は、クラスメイトと発表原稿を比較したり、再構築したりする様子が見られた。同時に、生徒は、本時を誰と学ぶかを決定する。例えば、個人やクラスメイト、教員やALTなどである。また、一人1台端末を用いて、自らの発表を動画撮影して振り返ったり、クラスメイトやALTから価値付けしてもらったりしながら発表の質を高める。さらに、正しい発音やイントネーションに気付いたり、適切な難易度の語句に変更したりしながら、発表原稿の加除修正に取り組む。一貫性のある発表を目指して、クラスメイトや教員と発表の内容や順序、展開や構成を繰り返し確認し合ったり、協働的に学び合ったりして、自らの考えを形成したり深化させたりすることを繰り返す。教員は、デジタルワークシートを活用しながら、生徒が適切な方法で学習を進めているかを確認し、個々の生徒が目標を達成するために必要な支援を行う。そして、後日にパフォーマンステストを実施する。このように、生徒が自ら学び方を選択し、課題解決に向けて、主体的に学びを形成していく単元構成を設計した。

(2) 生徒の主体的な学びを促すデジタルワークシート

本研究では、単元構想と同様に生徒が学びの過程を自ら構築し、主体的に課題解決へ取り組むことを目的として、デジタルワークシートを開発した。ワークシートをデジタル化にすることで、教員は生徒の学習の進捗状況を確認することが容易となり、生徒一人一人に最適な学習支援を行うことができる。

ワークシートIの構成は、①憧れの人を決める、②その人に関する事実や情報をまとめる、③その人に関する自分の考えをまとめる、④話の順番を決め、相手が聞きやすい発表の構成を考える、⑤文と文のつながりを示す語句を調べる及び⑥憧れの人に関する発表原稿を英語で書く、である。

このように、話し手として伝えたい内容や順序、聞き手に分かりやすい展開や構成などを考えたり、事実と考えを分けて整理したりする活動を行うことで、英語を話したり書いたりする際に、一貫性のある論理的な表現ができるようになることが期待される。ワークシートⅡでは、生徒は自己課題に応じた学習手順や学び方を考えて、学習の計画を立てる。

本研究では、第5時から第8時において、生徒は、〔2〕学習の手順を確認しよう（学習内容）及び〔3〕どのように学ぶかを確認しよう（学習方法）から学習方略を選択し、〔4〕学習の計画を立てよう〕に記入する。また、〔5〕学習を振り返ろう〕では、生徒は自己評価を行い、学習の成果や課題を認識する。自己評価において、その結果の原因を適切に捉えるとともに、次時の学習内容や学習方法への適用という視点から自己の学びを振り返り、次の学習に生かすサイクルを形成する。なお、生徒が選択した〔2〕学習内容と〔3〕学習方法の結果については、p. 7に示す。

4 検証授業

検証授業は、令和7年9月16日から同年10月2日までの期間に実施した。対象は中学校第1学年187人であり、5学級において1学級あたり8時間、合計40時間の授業を行った。

5 事後調査

(1) 生徒の質問紙調査（そう思う／どちらとも言えない／そう思わない）

表1 生徒対象質問紙調査結果（n=164）

		そう思う	どちらとも言えない	そう思わない
①英語の授業で自分の考えを発表する場面では、自分の発表がうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。	事前	60%	19%	21%
	事後	80%	13%	7%
②英語を話すとき、自分が知っていることや思っていることを整理して、伝える順番を考えて話している。	事前	70%	17%	13%
	事後	80%	11%	9%
③英語を話すとき、自分が知っていることや思っていることを整理して、伝える順番を考えて話している。	事前	63%	22%	15%
	事後	76%	11%	13%
④英語の授業で分からないことや詳しく知りたいことがあったときに自分で学び方を考え、工夫している。	事前	62%	18%	20%
	事後	71%	14%	15%
⑤英語の授業では、先生から与えられた問いや課題に対して、自分で考え、自分から取り組んでいる。	事前	73%	17%	10%
	事後	85%	8%	7%
⑥将来、英語を話せるようになりたい。	事前	91%	4%	5%
	事後	95%	1%	4%
⑦英語を話すことが好きだ。	事前	37%	20%	43%
	事後	49%	23%	28%
⑧英語の勉強をすることが好きだ。	事前	48%	17%	35%
	事後	55%	24%	21%

(2) 生徒の自由記述（全体 n=164／回答者 n=140）（n=140：肯定的 136人／中立 4人／否定的 0人）

事後調査の自由意見では、次のような意見が見られた。

- ・「友達との話し合いの時間をもらえることが多かったため、自分の発表原稿の中で、分かりにくい単語や、文章の違和感があるところなどに気付くことができた。」
- ・「この単元では、発表に向けての一つ一つの授業が、自分で目標を考え進めることができたので、とてもよかった。」

質問紙調査や生徒の自由記述から、英語学習への意欲に肯定的に回答した生徒が増加していることから、第5時から第8時において、教員が生徒の学びに伴走したり、生徒同士で協働的に学び合ったりすることが、学習における足場掛けとして機能したと考えられる。

(3) まとめり（一貫性）に関する成果

中学1年生が英語のスピーチで「憧れの人」を紹介しました。
第4時原稿と第8時原稿をA, B, Cで評価してください。評価基準の例は、以下のとおりです。

Aの文章 (例)

Hello, everyone.
My hero is Ohtani Shohei.
He is a baseball player.
I like Ohtani Shohei because he is great. (He is great, so I like Ohtani Shohei).
He is from Iwate, and he plays in the Major League in the U.S.
He can hit many home runs.
He can pitch balls fast, too.
I like watching Ohtani Shohei's games.
Also, he is kind to fans and teammates.
So, I respect Ohtani Shohei very much.
I want to be a great baseball player like Ohtani Shohei someday.
Thank you.

A: 以下の3点である。

- ・事実と考えが整理されている。
- ・文と文のつながりを示す語句を使用している。
- ・論理的な構成になっている。

*この場合、論理的な構成とは、話し手が伝えたい内容や順序を考え、聞き手にとってわかりやすい展開になるように工夫し、事実と自分の考えを分けて整理していることとする。

Bの文章 (例)

Hello, everyone.
My hero is Osaka Naomi.
She is a tennis player.
She can play tennis.
She can speak English.
She is from Osaka.
She likes sushi.
I like watching Osaka Naomi's games.
I play tennis.
My friend and I play tennis together.
I want to be a tennis player.
Thank you.

B: 以下の2点である。

- ・上記Aを満たさないもの。
- ・事実と考えが整理されている。

C: 上記Bを満たさないもの。

①「知識・技能」については、音声を評価する。

②「思考・判断・表現」の評価基準

単元を通して指導したことを踏まえて、以下の3つの条件を全て満たしていれば「a」としている。

条件1: 憧れの人に関する事実を紹介している。
条件2: 憧れの人に関する自分の考えを紹介している。
条件3: 論理的な構成と言葉のつながりを意識し、内容に一貫性をもって紹介している。
この場合、論理的な構成とは、話し手が伝えたい内容や順序を考え、聞き手にとってわかりやすい展開になるように工夫し、事実と自分の考えを分けて整理していることとする。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的・学習活動の振り返り
a	三人称単数現在形を含め、発表全体を通して、おおむね誤りなく発音して話すことができる。	3つの条件を満たして、発表している。	3つの条件を満たして、発表しようとしている。
b	三人称単数現在形を含め、発表全体を通して、発音に一部誤りはあるが、コミュニケーションに支障なく話すことができる。	条件1と条件2を満たして、発表している。	条件1と条件2を満たして、発表しようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

図4 パフォーマンステスト ルーブリック評価

図3 発表原稿評価基準のプロンプト

本研究の主題である「事実と考えを整理し、まとまりのある内容を伝える力」の変化を定量的に把握するために、第4時終了後及び第8時終了後における生徒の発表原稿を比較・分析した。分析方法として、生成AIに、図5のプロンプトと各時点で作成された生徒の発表原稿を入力し、評価を行った。なお、左記のプロンプトは、授業中に、生徒に対して示しているパフォーマンステストのルーブリック評価及びALTの評価基準と同一の内容である。

第4 研究の成果

表2 文章のまとまり（一貫性）の評価（n=140）

	第4時	第8時
A評価	8% (11人)	70% (98人)
B評価	76% (106人)	29% (41人)
C評価	16% (23人)	1% (1人)

表3 第4時原稿と第8時原稿の評価推移（n=140）

評価推移	割合
B→A	63% (88人)
C→A	1% (2人)
C→B	15% (21人)
A→A	6% (8人)
B→B	12% (17人)
C→C	1% (1人)
A→B	2% (3人)

生徒140人の第4時原稿と第8時原稿における文章の一貫性を比較した結果、A評価は8%から70%に増加し、B評価は75%から29%、C評価は17%から1%に減少した。この変化は、多くの生徒がB評価からA評価へと改善したことを示している。(表2) 個別の評価推移では、B→Aが最も多く63%を占め、さらにC→AやC→Bも合わせると低評価からの改善は16%に達し、本研究の単元構成が、幅広い層の生徒に対して、一定の効果が

があったと考えられる。一方で、評価の低下はA→Bのわずか2%であった(表3)。「憧れの人を発表する」パフォーマンステストでは、A評価82%、B評価17%、C評価1%であった。なお、パフォーマンステストにおけるALTの評価基準は、図3と同一である。第8時発表原稿の評価と比較すると、A評価が12%上昇している。

表4 ALTによるパフォーマンステスト 評価（思考力・判断力・表現力）（n=140）

A評価	82% (115人)
B評価	17% (14人)
C評価	1% (1人)

一方で、C評価はALTの評価と第8時発表原稿ともに1%であった。この結果から、文章の一貫性向上は話すことにおける思考力・判断力・表現力の

の向上にも寄与していることが示唆される。また、発表原稿のまとまり（一貫性）がどの程度向上したかを検証するために、第4時原稿と第8時原稿の評価（A=3, B=2, C=1）を比較し、対応のあるt検定（paired t-test）を実施した（n=140）。第4時原稿の平均値は M=1.89、標準偏差はSD=0.49、第8時原稿の平均値は M=2.69、標準偏差はSD=0.48であった（t(139)=-19.03, p<.01）。

よって、第8時原稿の評価が、第4時原稿よりも高いことが確認された。両者の差は有意であり、この差は偶然によるものではなく、授業の進行や学習活動の成果によって、第8時原稿におけるまとまり（一貫性）が向上したことを示している。

さらに、文章のまとまり（一貫性）の向上における要因を探るために、2つの統計検定を行った。まず、文章の結束性を高める文と文のつながりを示す語句の増加と文章の一貫性の関連を調べるため、カイ二乗検定を行った。140人を対象に文と文のつながりを示す語句の使用数と評価（A・B・C）の関連性を検討した。

表5 第4時原稿と第8時原稿の評価推移と文と文のつながりを示す語句の相関表

評価推移	人数	割合	文と文のつながりを示す語句を増やした生徒の人数	合計	評価
B→A	88人	63%	44人	60/111	上がった
C→A	2人	1%	1人		
C→B	21人	15%	15人		
A→A	8人	6%	4人	13/26	変化なし
B→B	17人	12%	9人		
C→C	1人	1%	0人		
A→B	3人	2%	0人	0/3	下がった

文と文のつながりを示す語句については、第4時原稿の平均が2.2個、第8時原稿が2.7個であった。結果、評価の変化と文と文のつながりを示す語句の増加には統計的に有意な関連は認められなかった（ $\chi^2(2, N=140) = 3.21, p = .201$ ）。

次に、第4時原稿から第8時原稿にかけて、評価がBからAへと向上した88人を対象に、「語数の変化」と「文と文のつながりを示す語句における使用数の変化」の2点に注目した。語数の変化については、第4時原稿の平均語数が59語（SD=16.41）、第8時原稿が57.5語（SD=13.98）であり、対応のあるt検定の結果、有意な差はみられなかった（ $p = .07$ ）。

以上のことから、語数については全体として大きな増減は認められないと言える。各生徒の原稿における語数の差を±5語以内、文と文のつながりを示す語句の差については±1語以内を基準とした。これら2つの基準を組み合わせ、総合判定を行った。その結果、88人のうち約29.5%の生徒が両基準を満たしていた。これらの結果から、評価がBからAに改善した生徒の約3割は、第5時から第8時において、語数を大きく変えることなく、以下の点を改善して、文章のまとまり（一貫性）を高めたと考えられる。

- ①事実と考えの区別を明確にした。
- ②文章の結束性を高めるために、文と文のつながりを示す語句を使用した。
- ③文法やつづりの誤りを修正した。
- ④文章構成が明確にして、自然な話の流れになるように修正した。

一方で、残りの生徒については、語数や文と文のつながりを示す語句に一定の変動が見られたものの、多くの生徒が自らの原稿を加除修正する過程で、文章の結束性を高めるために、文と文のつながりを示す語句を使用したり、文の内容や順序、展開や構成を見直したりしていた。

よって、本研究では、語数の増減と文章の一貫性の向上との間に明確な関連性は認められなかった。一方、文と文のつながりを示す語句については、その使用数ではなく、文脈に応じて適切な接続関係を示すことが、一貫性の向上に寄与することが分かった。例えば、等位接続詞を用いる際に、並列・逆接・選択・結果・理由といった関係を正確に捉え、それに応じた語句を選択して用いることが、一貫性の向上に有効であることが明らかになった。

以下に、生徒の第8時原稿（例）を提示する。

Hello, everyone.
 My hero is ●●.
 He is a karate world champion.
 I think he is super cool!

He is from Kyoto, Japan.
 He plays for Japan's national team.
 He did very well at the World Championships.
 I love watching his matches.
 His low kicks and high kicks are amazing.

He is also very nice to his fans.
 I really respect him and want to be a great fighter like him someday.
 Thank you.

この生徒は、第4時ではB評価であったが、第8時には等位接続詞 and（並列）の適切な使用に加え、事実と考えが整理され、話の展開や構成も自然になったことから、A評価へと改善した。なお、第8時原稿の語数については、第4時原稿と比較して、語数+3語、文と文のつながりを示す語句数-4語であった。

また、この生徒の振り返りには、次のようなコメントが見られた。

時	学習内容	学習方法	自己評価の理由と本時で分かったこと
第7時	視覚資料を作成する	個人で考える	本時の自己評価は◎です。今日の授業内容に集中して取り組めたからです。また、本時の授業で分かったことは、ALTの発表を聞いて、ただ難しい単語を使っていればよいのではなく、ゆっくり発音したり、相手が理解しやすい語句を使ったりすることで、よりよい発表になることが分かりました。授業の後半は、友達と発表の練習をし合いました。
	発表の練習をする	友達と相談	
第8時	発表原稿を再構築する	個人で考える	本時の自己評価は◎です。今日の授業内容に集中して取り組めたからです。また、今日の授業で分かったことは、自分の発表原稿は、「He is」を多く使っていたので、文と文のつながりを示す語句を多く使いました。文をつなげることをとても工夫しました。授業の後半では、友達と発表の練習をし合い、お互いに内容が伝わるかを確認しました。
	語句や表現を調べる	友達と相談	

この生徒の第4時原稿と第8時原稿では、次のような変化が見られた。

第4時原稿	第8時原稿
He plays for the Japanese national team and got very good results at the World Championships.	He did very well at the World Championships.
He is good at low kicks. He is also good at high kicks.	His low kicks and high kicks are amazing.

聞き手が未習である result を別の語句に置き換えて簡潔な表現に修正している。また、等位接続詞 and を適切に用いて2文を1文に統合している。さらに、第8時では、自分の意見を3文追加していた。以下に、評価がBからAに改善した88人の生徒を対象に、第5時から第8時にかけて、ワークシートIIで、生徒が選択した学習内容及び学習方法の回数とその割合を示す。

表6 ワークシートIIで生徒が選択した学習内容及び学習方法 (n=88)

②学習内容	第5時	割合	第6時	割合	第7時	割合	第8時	割合
	(回)	(%)	(回)	(%)	(回)	(%)	(回)	(%)
①	38	36	28	25	31	29	23	24
②	8	7	13	12	15	14	6	6
③	12	11	14	13	14	13	10	10
④	48	45	50	45	34	31	42	44
⑤	1	1	4	4	11	10	12	13
⑥	0	0	1	1	3	3	3	3
③学習方法	第5時	割合	第6時	割合	第7時	割合	第8時	割合
	(回)	(%)	(回)	(%)	(回)	(%)	(回)	(%)
①	33	30	21	19	21	20	28	31
②	54	49	58	54	61	58	53	58
③	0	0	0	0	1	1	0	0
④	22	20	26	24	14	13	9	10
⑤	1	1	3	3	9	8	1	1
⑥	0	0	0	0	0	0	0	0

- | | |
|---|---|
| ② | 学習内容については、①発表原稿を再構築する。②発表原稿を比較し合う。③聞き手に分かりやすい語句や表現を調べたり、考えたりする。④発表の練習をする。⑤視覚資料を作成する。⑥オリジナル（自己課題に応じた学習内容）。 |
| ③ | 学習方法については、①個人で考える。②友達と相談。③教科書を読み返す。④インターネットの活用。⑤先生やALTと相談。⑥オリジナル（自己課題に応じた学習方法）。 |

学習方法については、第5時から第8時にかけて、多くの生徒が、[友達と相談]を継続的に選択しており、クラスメイトと協働しながら自己課題に取り組んでいる傾向が確認された。

よって、本研究の成果から、文章の一貫性を高める上では、協働的な学びを通して、p. 6にある①～④の誤りや課題に気付き、その修正方法を共有できることが効果的であると考えられる。また、聞き手に配慮する姿勢が身に付くことで、語句や文法の難易度を調整したり、論理の飛躍や矛盾を見直したりする必然性が生まれる。このように、クラスメイトとの対話や助言を通して、自分では気付けない改善点を把握し、より一貫性の高い文章へと改善する様子が見られた。

本研究の成果をまとめると、以下のとおりである。

- ・「英語の授業で学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげている。」や「英語の授業で分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫している。」という質問に肯定的に回答をした生徒が増えたことから、本研究の単元構成の中で、生徒が学習の自己調整を図ろうとしていることが示唆された。

- ・生徒の自由記述から、自己課題をクラスメイトや教員と協働的に取り組むことで、生徒が、自らの考えを形成したり、深化させたりする様子が見られた。

- ・まとめ（一貫性）に関する成果から、生徒一人一人が、自己課題の解決に向けて学習内容や方法を自ら決定することができる単元構成の中で、学習の自己調整を繰り返した結果、内容にまとめのある表現を行う力が一定程度向上する傾向が見られた。

第5 今後の課題

本研究を通して明らかになった課題を、以下の3点に整理して述べる。

第一に、本研究で確認された学習成果と学力向上との因果関係については、引き続き検証が必要である。本研究では第4時から第8時にかけて文章のまとめ（一貫性）が有意に向上したが、その要因が単元構成そのものによるものなのか、あるいは学習時間の増加によるものなのかを十分に検討するには至っていない。今後は、本研究の単元構成を用いた実践と異なる対照群として設定した比較を行ったり、生徒に学びを委ねる時間を比較したりしながら、学習成果の違いを検証することで、単元構成の有効性をより明確にしていく必要がある。

第二に、評価方法に関する課題である。本研究では生成AIを用いて発表原稿の評価を行い、教員やALTによる評価と一定の整合性が見られた。しかし、本研究で用いた生成AIによる評価は、文章の一貫性を構成する要素のうち、文と文のつながりや構成の明確さといった側面を中心に捉えており、内容の一貫性や生徒自身による考えの深まりをどこまで反映しているかについては、今後更なる検証が必要である。

第三に、本研究で扱った題材は、「日常的な話題」であり、令和5年度全国学力・学習状況調査で課題として示された「社会的な話題」を扱う学習場面への適用については十分に検証できていない。今後は、本研究の単元構成を社会的な話題を扱う学習場面に応用し、論理的に発表する力の育成にどのように寄与するのか、その有効性を検証していくことが課題である。